

特発性後天性全身性無汗症に関する研究
研究分担者 愛知医科大学皮膚科 大嶋雄一郎、道勇学病院長

研究要旨

愛知医科大学病院皮膚科における特発性後天性全身性無汗症の統計学的検討

A. 研究目的

愛知医科大学病院皮膚科における特発性後天性全身性無汗症（AIGA）の患者数は年々増加傾向である。今回AIGAの関連因子、治療法について当院の過去10年間のデータを解析した。

B. 研究方法

研究対象は2010年3月から2020年10月に全身の発汗障害（無汗または乏汗）を主訴とした当科受診患者181名。そのうちAIGAと確定診断した109例について性別、発症年齢、発汗障害部位、皮膚生検病理所見、血清IgE、コリン性蕁麻疹の合併、初期治療、ステロイドパルス施行回数、無治療期間、発症前の温熱環境曝露について統計的検討を行った。

（倫理面への配慮）

患者には診察時に得られたこれらの臨床情報について統計学的検討する旨を説明し、同意を得ている。

C. 研究結果

①受診患者人数の変遷：直近2年間とそれ以前の8年間で比較すると、発汗障害を主訴とする患者は73人から107人に、そのうちAIGA患者は50人から59人にどちらも増加していた。最近2年間だけで、それ以前の8年間の患者人数を超える受診人数であった。
②AIGAの男女比：男性が91%と圧倒的に男性が多かった。
③AIGAの年齢分布：10～30代が多かったが、若年、高齢者の症例も少数認めていた。
④コリン性蕁麻疹の合併：全体の79%（107例中79例）で認めた。
⑤温熱環境曝露：全体の40%で認めた。
⑥血清IgE上昇：血液検査を施行したAIGA患者のうち22%で認めた。
⑦汗腺周囲のリンパ球浸潤：病理組織検査を施行した88例中8例（9%）で認めた。
⑧重症度：83%（107例中89例）が重症であった。
⑨初期治療と奏効率：ステロイドパルスが69例と最も多く、奏効率は90%であった。
⑩ステロイドパルス施行回数：平均1.91回で、1～2回が圧倒的に多く全体の3/4を占めていた。
⑪無治療期間とステロイドパルス療法の回数：AIGA発症から短期間でステロイドパルスを開始できた例ではパルス回数が少なく、発症からパルス開始までの期間が長い方が、パルス回数が必要であった。
⑫無治療期間とステロイドパルス療法の効果発現までの期間：発症からパルス開始までの期間が長いと、パルスが効くまでに時間がかかる傾向があると考え解析したが、明らかな有意差は認めなかった。ステロイドパルス療法の効果は、14日以内にみられること

が多く、9割の症例では1ヶ月以内に効果が認められた。

⑬ステロイドパルス回数と発症年齢：ステロイドパルス回数と発症年齢に相関はなかった。

D. 考察

10年間の当院のAIGA患者に関して臨床統計的に検討した。受診患者人数は直近2年間とそれ以前の8年間で比較すると、AIGA患者は50人から59人に増加し、最近2年間だけで、それ以前の8年間の患者人数を超える受診人数であった。その理由として、AIGAが難病指定疾患となり、AIGAが医師だけでなく世間にも認知されたことが受診率増加につながっていると考えられる。またAIGAは発汗が促される夏に軽快、汗をあまりかかない冬に増悪する傾向であるため、2020年から新型コロナウイルスがまん延し、外出が減ったり、部活などが中止になったりと、汗をかく機会が減ったことが、AIGA増加に影響がある可能性もある。

AIGAのコリン性蕁麻疹などの関連因子や男女差については既存の報告と変わりなかった。無治療期間が長いほどパルス回数が必要であるため、早期診断・早期治療が重要であると考えられる。

パルス療法の効果発現は14日以内にみられることが多く、9割が1ヶ月以内に効果がみられており、1回目のパルスと2回目のパルスの施行期間は約1ヶ月あけて、パルスの治療効果を確認した方がいいと考える。

E. 結論

AIGA患者数は多くなっており、パルスの奏効率から早期診断・早期治療が重要である。

ステロイドパルス療法の効果発現は14日以内にみられることが多い。9割が1ヶ月以内に治療効果がみられていることからパルスとパルスの期間は約1ヶ月あけて、治療効果をみた方がいいと考える。

G. 研究発表

1. 論文発表
臨床皮膚科へ投稿中

2. 学会発表
2021年日本皮膚科学会総会の一般演題で発表。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 該当なし
2. 実用新案登録 該当なし
3. その他 該当なし